

1～9節にはイエスに遡ることができる「種を蒔く人」の譬えが記されています。種を蒔く人が出来るだけ広く蒔かれるように腕を広げて種を蒔きました。道端、石だらけで土の少ない所、茨の中に落ちた種は実を結ばず、良い土地に落ちた種が多くの実を結んだというのです。イエスは四つの別な場所ではなく、一つの良い土地、畑の話をしています。まず、この福音書の文脈に沿って読んでみます。種を蒔く人はイエス自身です。種蒔きには、まず、無駄に見える労苦があるということです。種を蒔いても鳥に食べられてしまったり、枯れてしまったり、実を結ばないことがあるのです。また、種蒔きとは、実りを見るまでには時間がかかるということです。最も大事なポイントは 8 節にあります。一生懸命に神さまの救いの言葉を語ってもそれを頑なに受け入れない人たちや敵意を露わにしてくる人たちがいて、蒔いても芽を出しません。さらに、信じたように見えた人たちにも離れていくことがありました。しかし、イエスは必ず芽を出し、実りの時が来ることを信じ、収穫を期待する農夫のように種を蒔いたのです。

そして、18 節からの譬えの説明は譬えと共に共観福音書に見られますが、イエス以後マルコ以前の初代教会がこの譬えを教会の現状、信仰者の信仰生活を説明するものと解釈した内容が記されていると考えられています。大切なのは、自分がどの土地に当てはまるかを考えるのではなく、私たちにいつも神さまの言葉が蒔かれていることを知らされつつ、それを聞く耳を持つ者となることです。

では、イエスの話した譬えそのものを見てみたいと思います。マコ 4:3 後半～8 です。新共同訳はギリシア語原文とは異なります。まず、蒔かれた種は、原文では、道端、石地、茨に落ちた種は単数形、良い地に落ちた種は複数形です。また、収穫も、原文では、「全体として 30 倍、60 倍、100 倍と増えていった」です。つまり、種の多くは良い土地に落ち、成長し、実を結び、土地全体で実りが爆発的に増えていったのです。一人ひとりに与えられている命の種は今のままで既に 30、60、100 倍 の実りの約束があるのです。イエスの周りには病に苦しんでいる人、様々な悩みや辛さに打ちひしがれている人、律法を守りたくても守れず罪人とされた人、社会から疎外された人、でした。その人たちに対して、その人たちの状態をよくよく理解した上で、イエスは「あなたたちは畑に蒔かれた小さな一粒の種であるように自分のことを思っているかもしれないが、神さまの支配が実現しようとする今、その蒔かれた一粒の種には、今あるがままで、30 倍、60 倍、100 倍という約束があるのだと。今、その約束のうちにあなたたちは祝福されている。だから、どのような苦境にあろうとも決して希望を失うことはないのだ。」と話しているのです。